

# かささぎ通信 第48号

2016年9月9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年七月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年9月号初出の「一年生」「さいかち虫」を読みました。

「一年生」(森三郎名義)は、一年生になってすぐに、頭の皮膚病のことを隣の席の子にからかわれて、学校へ行くのがいやだとだだをこねる少年・純一の話です。

「さいかち虫」(浅川とき名義・目次では藤川きよ)は、六年女組の主人公が、唱歌会で独唱をする人を選ぶ際に感じた理不尽な思いをまとめた話です。

二つの作品はどちらも当時の読者の子どもたちの日常にありそうな話です。

一年生の純一をからかった子には、自分がいかに相手を傷つけているかという意識はなく、小学校へ上がる前の小さいままでいたかったなという純一の思いを残したまま、話は終わっています。

一方、六年生の「私」は、仲良しの米子さんこそ独唱者にふさわしいと思えますが、お母さんと二人暮らしの米子さんは、病気のお母さんの看病のために欠席して独唱のテストに間に合いませんでした。独唱に決まったらはお医者さんの娘で、初めから自分が選ばれると決めたかかった態度に「私」はよい感じを抱いていません。

どちらの作品もすっきりと終わっているわけではありません。作者の森三郎さんは、読者の子どもたちからかわれる側、からかう側、また、独唱者に選ばれる側、選ばれなかった側それぞれに自分を重ねながら、自分ならどうするかという問題を投げかけているように思えます。

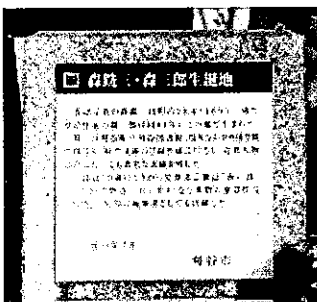
ところで、「一年生」の中に「日月(にちげつ)ボール」という遊びが出てきます。これは今の「けん玉」のことで、大正時代に生まれたもので、当時は「日月ボール」と呼ばれていたのだそうです。(参考 文溪堂『けん玉』けん玉の歴史) 実際に「日月ボール」の名前を使っていた方がいらつしやいましたら、是非教えてください。

また、「さいかち虫」は「かぶとむし」のことで小学館『日本国語大辞典』には「サイカチの木によくいるところから」と、名前の由来が書かれています。「サイカチ」はマメ科の落葉高木で、夏、葉間から花茎をのびし小さな黄緑色の四弁花を狭円錐状につけるのだそうです。唱歌会では六年女組の合唱曲として「よしきり」(三木露風作詞)を歌い、独唱曲として、「さいかち虫」(北原白秋 作詞)を歌うことになっています。どちらも作曲は山田耕筰で、「さいかち虫」は大正十一年の作曲、「よしきり」は大正十三年の作曲です。「山田耕筰全集」(第一法規出版株式会社)に楽譜が載っていますが、なかなか難しい曲です。森三郎さんは「ハーモニカ」『赤い鳥』昭和8年10月号初出)の中でも北原白秋 作詞、山田耕筰 作曲の「私たちの花」(大正14年発表)を取り上げています。「かささぎ通信」第36号参照)「さいかち虫」も音楽の好きな三郎さんならではの題材です。

## 「森三郎・森三郎生誕地」

### 歴史の小径案内板設立!!

去る7月7日市内広小路六丁目の森三郎三・三郎兄弟生誕地跡地(正木克己氏所有地)に、刈谷市によって案内板が設立されましたので、是非ご覧ください。



次回予定 平成28年10月14日(金)午後1時~3時

『赤い鳥』昭和9年11月号初出作品「猫の子」「弟」

「弟」は『森三郎童話選集 夜長物語』に掲載されています。